僕と私の初恋

紅の雲雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と私の初恋

【Ｎコード】
Ｎ４０８０Ｐ

【作者名】
紅の雲雀

【あらすじ】
僕と
私の
初めての恋・・・

～製作中～

プロローグ

僕は高校の入学式……彼女に恋をした。

私は高校の入学式……彼に恋をした。

たぶん彼女は僕の気持ちに気づいてない。このさきも気づくことはないだろう。

彼は私の気持ちに気づいてはいないと思う。いつまでも片思いのままでいいと思う。

いつまでもこの気持ちを胸の奥深くに隠すと思う。

でもいつかはこの気持ちを伝えたいと思う。

その恋が叶わなくても。

たとえ答えがダメだとしても。

僕は……

私は……

今日こそ……この気持ちを伝えたいと思う

ホームルーム

俺は今年この天麗高校に入学した。そして彼女……笹川遥(ささがわはるか)さんに恋をした。出会いは簡単入学式で一目惚れだ。それから一ヶ月たつがまだ告白もできてないし、話したこともない。ヘタレだと思ったならヘタレと言えばいいさ、年齢＝彼女いない歴だし、女の子とそんなに話したことない。しかも俺は全てのことに対して普通だ。勉強・運動・容姿……どれも全部普通、そんな俺がモテるはずがない。友達関係も普通で、それなりに仲の良い友達はいるが親友と呼べる親友がいない。ん？　俺の名前か？　俺は瀬川誠司(せがわせいじ)だ。

「お～い、瀬川くん。おはよう」

「あ、信也か……」

「反応が薄いぞ瀬川！」

「……おはよう」

「テンションが低いぜ、もっと上げようぜ！」

「ああ」

こいつは武山信也(たけやましんや)、最近仲良くなった。……いつもテンションが高い。あといつも俺に構ってくる。

「おい～、テンションが低いよ……幸せが逃げてくぜ」

「幸せか……」

幸せってなんだろうな？　お金持ちになること？　夢を叶えること？　さぁ、俺には分からない。みんな幸せになりたいって言うけど幸せってなんだよ。

「幸せってなんだって顔してるな、俺の中の幸せはみんなと仲良くすることだなー」

「へー、みんなと仲良くねー。女の子たちと仲良くしたいじゃないんだ」

「おお、よく分かったな、女の子たちと仲良くしたいって。でもそれは男子全員が思ってることだろ」

「ふーん、男子全員ねー」
まあ、俺も笹川さんと仲良くしたいけど……
「おーい、お前等席に着け。ホームルーム始めるぞ」
「じゃあ後で、瀬川」
「ああ」

私は今年ここ天麗高校に入学しました。そして彼……瀬川誠司くんに恋をしました。私は入学式のときに彼に一目惚れして好きになりました。でも入学式から一ヶ月まだ告白ができてません。話したこともないし、話すきっかけもないですし。私はどうすればいいんでしょう。
「どうしたの遥、元気ないよ」
この子は私の親友、椎名香奈（しいなかな）
「え？　そうかな、私は元気よ」
「そうかな」
「だからなんでもないよ」
「恋する乙女の顔してるよ」
「え！」
「やっぱり」
「ちょっ！　香奈！」
「顔赤いよ」
ひどいよ……。もうバレたよね……
「で！　誰？　好きな人」
「誰でもいいでしょ！」
「ケチだな遥は」
好きな人がいるってバレた……
「なんなら私が手伝ってあげようか、遥の恋」
「ほ、本当」

「手伝ってあげるから、誰なの好きな人」
「えーと……瀬川誠司くん……」
「え、マジ」
「ひどいよ……」
「いや……誠司くんって女子にかなり人気の誠司くんだよね」
へー誠司くんってモテるんだ……
「分からないけどたぶんそう」
「へーあの男子が苦手な遥がね、恋かー」
「へ、変なの」
言わなきゃよかったかも……

「おーい、お前等席に着け。ホームルーム始めるぞ」
「じゃあ後で遥」
「うん」

共通点がクラスメイトだけ……。まあ、ちょっとだけど話しかけやすいけどやっぱり恥ずかしい。いつ告白しよう……

共通点がクラスメイトってことだけか……。入学してから今日までいつも今日こそ告白するぞっておもってたけど、いつも緊張して失敗して……。

今日こそ告白……

幸せ？　それとも不幸？

それはいきなりの出来事だった……。幸運なような不幸、不幸のような幸運。

「よーし、入学式から一ヶ月たったことだし席替えするぞ」
「「「「「やったー！」」」」」
席替えか……。遥さんの隣だったらいいな。
「席替えはくじだ、いいな」
「「「「「はーい」」」」」
席替えはくじで決めるのかと思ってると……
「ちょ！　香奈！」
っと遥さんがいきなり大きい声をだして席を立った。
「何をしてるんだ笹川」
「い、いえ何も。スミマセンでした」
どうかしたのだろうか。先生は一呼吸おいて話した。
「じゃあ名簿順で引きに来い」
俺は『せ』か、ちょっと早いぐらいか。

「瀬川引きに来い」
「はい」
さーて何処の席になるのかな。
えーと、俺は窓側の一番後ろか
まぁまぁかな。俺のとなりって誰だろうな？　まぁ誰でもいいか。
本音は遥さんに来てほしいけど。

「な～、瀬川ってどこの席だ～」

「俺か？　俺は窓側の一番後ろだけど」
「よし！　俺はその前だ」
「え～」
「え～言うな！」

席替えか……。瀬川くんの隣がいいな。
「……遥」
小さな声で香奈が呼んできた。
「……何、香奈」
そして香奈は小さい紙切れを渡してきた。そこには……。
『今回の席替えで誠司くんの隣になってきっかけをつくらないとね。』
『絶対無理だよ。それにこのまま片思いでもいいし』
『ダメだよそれは。何なら私が2人をくっつけて、キスでもさせてあげましょうか？』
自分でも顔が赤いって分かった。
「ちょ！　香奈！」
「ごめんごめん、冗談だよ冗談」
「何をしてるんだ笹川」
「い、いえ何も。スミマセンでした」
あ～、瀬川くんは私のことをバカな子って思ったんだろうな……
「じゃあ名簿順で引きに来い」
私は『さ』だね。

「瀬川引きに来い」
「はい」
瀬川くんは何処なんだろうな……

「笹川引きに来い」
「分かりました」
お願いします、瀬川くんの隣になりますように。
えーと、私の席は窓側の一番後ろ……瀬川くんは何処だろう？
「遥何処だった？」
「え？　私？　私は窓側の一番後ろだったけど香奈は？」
「私は遥の前。またよろしくね」
「うん、よろしくね」
今回の席替えの前も香奈は私の前の席だった。

「じゃあくじで引いた席に行け」
「「「「はーい」」」」
俺は自分の席に向かった。そしたら隣が…遥さんだった……。俺は緊張して顔が赤くなったと思う。それからはすぐに自分の席に着いて机に顔をつけて顔を見られないようにした。

先生がそう言って私はくじで引いた自分の席に向かった。隣の人がまだだったから座ってると隣に誰か座った。私は隣を向くとそこには……瀬川くんがいた。私はすぐ顔が赤くなったから机に顔をつけて顔を見られないようにした。

「何してんの瀬川？」
「何やってるの遥？」

恥ずかしいから顔を机にくっつけてるの！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4080p/

僕と私の初恋

2010年12月12日14時40分発行